

# 豊潤の里 だより

## 「新道が難しいときは、一般道を利用する！」

～ 安心安全なくらし、静かな生活に甚大な影響 ～



「(産業廃棄物の搬入については) 新道建設が難しいときは、一般道を利用する」。  
栗本ホールディングス (以下栗本HD) の担当者は、自治協との会合で言った。  
栗本HD が平成29年に広島県へ提出した「事前協議書 (事業概要の説明書)」やそ  
の後の説明から、産業廃棄物の搬入経路として、次の2つが提示されている。

【経路1】 国道185号線沿いにある諏訪建設から農道を入り本谷地区を通る計画

【経路2】 国道185号線沿い湖畔石油西約50mから山道を入り本谷地区を通る計画

その説明を聞いたときは、「新道」を造ること、「新道」を造るには莫大な金額と労力と時間がかかることを漠然と思った。「新道を使って産廃を運ぶ」と勝手に思い込んでいた。同協議書からそう思い込まされていたのかもしれない。

今考えると、この「新道」建設計画には大きな疑問点がある。栗本HDの資料には、「工事着工予定年月日は平成32年4月1日」、「事業実施予定期間は平成33年10月から平成48年9月30日まで」と明記されている。(予定はずれ込んでいるが。)

【疑問】 搬入路としての「新道」が1年半でできるのか。山道を切り開き、大型車両が1日25台(往復50台)以上通る搬入路を造ることが可能なのか。搬入路のための土地取得は全く白紙状態である。

ここで推察されることは、栗本HDは当初から一般道を利用し産業廃棄物の搬入を当初から考えていたのではないかという点である。道路交通法上の規制はあるにしても、一般道は「誰が通ってもよい道」として位置づけされている。基本的には産廃を積載した車両の通行も規制はない。

木谷の狭い生活道に産廃を満載した大型トラックが1日25台以上(往復で50台以上)行ったり来たりしている状況を想像してみると、息苦しくなってくる。子どもたち及び住民の安全が確保されるのか。当然静かな暮らしが守られるはずもなく、私たちの生活にも何らかの支障が出てくるに違いない。

この民間による最終処分場建設を、住民一人ひとりの問題として捉え、後世に産業廃棄物ではなく、美しい自然と安心安全な生活を残してやりたいと切に思う。



# (コラム) 歴史から知恵を学ぶ 第6話

## 赤崎海岸の海水浴場

元木谷自治協議会会長 植野洋文(西之谷在住)



この写真は、昭和 34 (1959) 年 7 月 26 日に海水浴場がオープンし、多数の人出で賑わっている情景である。安芸津町は海水浴場にふさわしい海岸を物色していて、砂浜と湾に囲まれた、穏やかな赤崎小宿根(こずくね)海岸が選定された。海岸に沿った道路もほぼ開通し、定期船も行き来していた。珍しさも相まって人気を博したが、残念なことに 2 年間のみの営業となった。

その廃業の要因については、①交通のアクセスが充分でなく、輸送面で不便だった。②近くに、整備された海水浴場が存在していた(竹原市の的場や大乘等)。③夏場だけの営業のため採算が合わなかった(安全監視等の人件費含む)。④もともと沖に浮かぶ「鼻繰島」周辺は魚種の豊富な海域でもあり、昭和 25 (1950) 年頃より「ボラ網漁」が盛んで、見張りやぐらで魚群の様子を観察し、ボラの大群を発見すると一網打尽に生け捕る漁法がおこなわれていた。漁業関係者との補償問題もあったのではないかと考えられる。

現在はカキの抑制棚(牡蠣ひび)が立ち並んでいる。短期間ではあったが一時期、老若男女が集う憩いの場所だったことは否めない史実である。小生も高校生だったので、そこで友達と楽しく泳いだ記憶がある。



当時のボラ網漁の様子(見張り台が見える)



現在の赤崎小宿根海岸

## 「持続可能な〇〇〇」と木谷

持続可能な農業、持続可能な発展、持続可能な自然環境、持続可能な地域社会、……。数年前から新聞などで「持続可能な〇〇〇」という記事を見ることが多くなりました。裏返せばこのまま成り行きに任せていると現状維持すらできなくなる可能性があるということなのでしょう。

視点を私たちが住む木谷という地域社会に移しても、このまま推移すれば働く人が減少して地域の産業を支える担い手が足りなくなり、現在お米やジャガイモを栽培している田畑は雑草が茂る原野になるかもしれません。

そうならないためには木谷の特色を活かし、魅力ある地域に作り変えていく必要があるでしょう。それにはどのような方法があるのでしょうか。行政に頼ることと私たち自身にできることに分けられると思います。

行政にはたとえば公共交通手段の維持や災害予防など、安心して暮らすための施策を期待するのは勿論ですが、働く世代が憩える場を作って木谷地域の魅力を向上させることも重要です。東広島市で唯一瀬戸内海に面している安芸津町の特色を活かす施策のひとつになります。

それは人を遠ざける産業廃棄物の最終処分場ではなく、人の集まる施設たとえば家族連れが楽しめる「海浜公園」のようなものです。泳げる場所や釣り場があればなお好条件です。この10月1日から操業停止となる安芸津クリーンセンターの跡地や竹原・安芸津最終処分場の跡地の活用策として考えることができます。さらに赤崎地区全体を健康促進にも役立つエリアにするため、この海浜公園を中心にして丘陵地帯の農道も活用して、海を眺めながら爽快に歩けるウォーキングコースを設定する、また潮風を感じながら走れるサイクリングロードを整備するなどすれば、明日への活力を養い健康寿命を延ばすことにも貢献できます。

木谷には秋祭りの大名行列に代表される伝統行事があり、江戸時代に盛んだった製塩や廻船業で栄えた元屋、明治・大正期の建築にも使われたレンガ製造など、産業経済の面でも豊かな歴史を持っています。木谷を持続可能な地域にするため私たちにできることは、これらの伝統や歴史を後世に伝え、ふるさとに誇りを持つ子ども達を育てていくことではないでしょうか。

## 木谷地域センター主催講座

### 「小学生のためのおもしろ理科実験」

8月3日に開かれたこの講座に参加した10名の子供たちは、大学の先生方に教わりながら「スライムをつくってみよう」と「冷たい冷たいマイナス196℃の世界」の実験に取り組みました。

つくたての餅のようなスライムをつくったり、液体窒素の中に花を入れて取り出しそれを握ると砕け散ることや、ふくらました風船を液体窒素の中に入れるとそれがしぼみ、取り出すと元に戻るなどを実験しました。



# 部会活動紹介

## 防災安全部会



7/18 消防団による土のうづくり

頻発する豪雨災害に備え、消防団の安芸津方面隊木谷分団17名が土のうづくりに汗を流し、約3時間で600個をつくり備蓄しました。

## 福祉生活部会



8/8 熱中症予防と見守りを兼ねて「友愛訪問」

熱中症予防にと、自治協と木谷地区社協蛟龍が準備した塩飴とお茶を持って、区長さんが303名の対象高齢者を見守り訪問しました。

<木谷自治協議会・木谷地区社協 蛟龍・区長>

・10月31日予定の敬老事業「福寿の会」は、今年も記念品の贈呈のみとさせていただきます。  
 ・「お茶の間カフェほぼろ島」と各地区の「地域サロン」は、広島県に再び出された「緊急事態宣言」により8月27日から9月30日まで中止となりました。

コロナ禍で中止の主な地域行事

- ・8/16 木谷郷川河口カニカニ大調査(中止)
- ・10/17 予定の木谷フェスティバル(中止)  
 (重松神社の例祭は、大名行列をとりやめ規模を縮小して行われます)
- ・10/23 予定の教育講演会(中止)

### 木谷自治協議会にご寄付をいただきました

ご厚情ありがとうございました。

令和3年9月 南條 誠 様(香典返し)

皆様からの温かいご寄付は、元気な木谷をつくるために活用させていただきます。

※ お問い合わせは、木谷自治協議会事務局(木谷地域センター内)までお願いいたします。

木谷の人口(住民基本台帳)	世帯数	人口(男女計)	男	女
令和3年8月末現在	692	1510	739	771
令和2年8月末との比較	-5	-38	-17	-21

編集：木谷自治協議会事務局 広報担当